

フォトシティさがみはら

これは、市民が写真文化により親めるよう実行委員会が編集・発行しています。

TOPICS



相模原市総合写真祭フォトシティさがみはら実行委員会
事務局：相模原市文化振興課 TEL 042-769-8202

アジア地域プロの部

さがみはら写真アジア賞のすごいラインアップ! これはアジアに生きるすべての人にとっての記録だ!

歴代さがみはら写真アジア賞一覧

年	地域	受賞写真家 受賞対象写真集他	どんな写真家? どんな写真?
2023年 第23回	香港	ERIC (エリック) 「香港好運」	1976年生まれ。1997年来日、西村カメラで写真を学ぶ。香港での時間と日本での時間が20年と並んで、改めて20年の変化を刻む香港を撮る。
2022年 第22回	台湾	張 詠捷 (ジャン・ヨンジェ) 「秦雅族故園長老」(故園のあるタイヤル族の長老シリーズ)	1963年生まれ。社会的アイデンティティやジェンダー、女性の地理的制約など多岐に創作視点とする彼女の作品は人類共通の歴史と文化があふれる。
2020年 第20回	タイ	マニット・スリワニチブーン 「極彩色のバンコク」	1961年生まれ。タイを代表する写真家として国際芸術の世界で最も知られる一人。変化し続けるバンコクがいつに完成形となり斬新に作品に仕上げた。
2019年 第19回	韓国	Area Park (エリア・パーク) 「二面の海」	1972年生まれ。東京都在住。韓国と日本を往来して活躍するドキュメンタリー作家。本作は2015年までの代表的なシリーズ収め「写真の路」はそのひとつ。
2018年 第18回	中国	唐 浩武 (Tang Haowu) 「農民工」	1966年生まれ。写真展キュレーターとしても活躍。現代写真の創作と研究に取組む。本作は無錫市の発展を支えた農村からの出稼ぎ民の矛盾を撮る。
2017年 第17回	モンゴル	Delgerjargal Davaanyam (デルゲルジャールガル・ダヴァニヤム) 「ENDLESS BEGINNING」(終わらぬ始まり)	1988年生まれ。2006年から社会の現実や日常を捉えるドキュメンタリー写真を撮影。本作では急激な経済発展により変わりゆくモンゴルを撮る。
2016年 第16回	インドネシア	Oscar Motuloh (オスカー・モトゥロー) 「SOULSCAPE ROAD」(魂の道)	1959年生まれ。1998年よりジャーナリストとして活動開始。本作は、2004年のスマトラ沖地震の惨劇とその後の10年近くを追う克明な記録。
2015年 第15回	台湾	張 照堂 (Chang Chao-Tang) 「歲月」	1943年生まれ。写真家として初めて台湾の国家文芸賞を受賞。1961年～2004年の自身の体験の断片写真である本作は戒厳令下の台湾の時代の風景を写す。
2014年 第14回	ネパール	Kishor Sharma (キショール・シャルマ) 「Living in the mist-the last nomads of Nepal」 (霧とともに暮らすネパールの最後のノマド)	1983年生まれ。ドキュメンタリー写真家としてカトマンズで活動。本作は、ネパールの少数民族ラフテ族を取材。失われていく民族の姿が霧深い山々とともに記録されている。
2013年 第13回	トルコ	Kursat Bayhan (クルサット・ベイハン) 「AWAY FROM HOME」(故郷から遠く)	1981年生まれ。2003年から紛争地域を中心に取材するフォトジャーナリスト。本作は、イスタンブールの移民地域を中心に撮影した写真で構成。
2012年 第12回	シンガポール	Ying Ang (イン・アン) 「You Think You're Safe Here」(あなたはここが安全だと思うだろう)	1980年生まれ。出生地シンガポールから27歳までいたオーストラリア、北米まで活動展開。本作は不動産投資隆盛の影で不穏な空気が漂うオーストラリアのゴールドコーストを舞台に撮影。
2011年 第11回	フィリピン	Veejay Villafranca (ヴィージェイ・ヴィラフランカ) 「A Race Divided: Chin migrants search for identity and life of peace」(分離された民族-チン族移民/アイデンティティと平和を求めて)	1982年生まれ。2006年よりフリー。AFP通信、ロイター通信ほか国連の仕事などに携わる。本作は、ミンヤマー軍事政権下の人権侵害から7万人以上のチン族が難民となる実態が撮られている。
2010年 第10回	バングラデシュ	Munem Wasif (ムネム ワシフ) 「SALT WATER TEARS」	1983年生まれ。英字新聞の写真家として活動開始。本作は、開港により塩害に苦しむバングラデシュ西部地域の人々の暮らしの記録。
2009年 第9回	インド	Amil Mehra (アミット・メーラ) 「INDIA A TIMELESS CELEBRATION」(古代の永遠の祝祭)	1967年生まれ。インドを中心に国際的に活躍。本作は、多文化・多宗教国家における祝祭が、庶民の生活に根差している視点で撮影されたもの。
2008年 第8回	インドネシア	Lans Brahmantyo (ランス・ブラウマントヨ) 「ソウル・オデッセイ」	1966年生まれ。コンサルや出版の企業家から2002年に写真家へ転身。風景や建築写真、トリプスツアー等を手掛ける。本作は中東の聖地をめぐる中で撮影。
2007年 第7回	マレーシア	Steven V-L Lee (ステイブン・リー) 「アウトサイド・ルッキング・イン・クアラランプール」	1964年生まれ。肖像や旅の撮影を中心に活動。イギリス・ロンドン在住。20年以上離れた故郷のカタコトの本作は異邦人と故郷の視点が変わる。
2006年 第6回	タイ	Surat Oathangnagrath (スラット・オスタナグラフ) 「グッバイ・バンコク」	1930年生まれ。2008年没。70歳を迎えてから撮り始め、変わりゆくバンコクの姿を主題として地域社会への郷愁を伝える。
2005年 第5回	ベトナム	Doan Cong Tinh (ドアン・コン・ティン) 「重要な瞬間/ベトナム戦争の写真資料」	1943年生まれ。人民軍新聞の写真家として従軍。ベトナム戦争の従来のイメージを補い、戦場を見つけた写真家には撮れない写真である。
2004年 第4回	台湾	沈 昭良 (Shen Chao-liang) 「映像・南方澳」	1968年生まれ。1993年より一貫してドキュメンタリーによる制作を続ける。本作は台湾三大漁港のひとつでさまざまな働く人々を捉えたもの。
2003年 第3回	韓国	Lee Gap-Chul (イ・ガプチュル) 「衝突と反動」	1959年生まれ。韓国をはじめ米、仏など国際的に活躍。大胆なアングルやフォーカスで韓国の伝統的風景を撮影した写真は生命力にあふれる。
2002年 第2回	中国	劉 錚 (Liu Zheng) 「国人」	1969年生まれ。一貫して自国をテーマに制作。写真家としてデビューした本作は、1994年から8年間にわたる中国各地の場所や人々の写真集。

さがみはら写真賞創設から1年後に設けられたアジア地域で活躍するプロを顕彰するのがさがみはら写真アジア賞。



第18回受賞作

日本と様々な分野で密接な関係にあるアジア諸国を対象として、広義の記録性に強い意志をもって活躍する写真家たちとその作品に贈られています。それも写真祭の回数を重ねて左記のように錚々たる顔ぶれになっています。



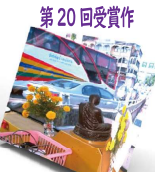
第19回受賞作

これはもう本市が誇るべきというより、アジアに生きるひとりとして誇らしい。優れたアジアの人々の歴史、社会課題を含めた暮らしに文化、そこで繰り広げられる人間の感受性や思想を記録して表現、写真作品に、わたしたちは記憶しようとする改めて、自身によって立つ地域と歴史を意識させられます。



第22回受賞作

ともに生きるアジアの人たちに思いを馳せつつ、歴代アジア賞受賞の一覧を眺めてみて



第20回受賞作



第15回受賞作

ください。きっと同じ気持ちになられるのでは? 叶うなら、いつか全作品を見渡すことのできる機会を作りたいものです。さあ、今年真家はどこださるか。顕彰されるアジア賞の写のどんな記録を見せてく市民のみなさんとワクワク待ちたいものです。



第14回受賞作



▲第23回受賞「香港好運」から

第23回アジア賞受賞のエリックさんからひとこと
※エリックさんは2009年第9回の新人奨励賞受賞者でもあります。

それぞれの作品が受賞することで自分自身に自信ができました。気持ちといった面での違いといった違いはないのですが、写真を撮りたい意欲は変わらないです。ただ、2009年の頃の瞬発的な撮影の動きは再現できない自分を感じたりします。また、2018年の頃の欲望のままの撮影は、2009年の撮影経験があったからこそと改めて感じました。



ERIC

エリックさん